

2001 年度学会報告要旨

古代ロシア語における動詞 быти の用法について

横 井 幸 子

быти 単純過去 2, 3 人称単数形 быи の扱いについては、主に「быи はアオリストである」、「быи はアオリスト的活用をするインパーフェクトである」、「быи は不完了体インパーフェクトである」とする諸説があり、見解の一致が見られない。本発表では、『ノヴゴロド第一年代記（シノド本）』、『ロシア原初年代記』を資料としながら、統語レベル、意味レベル、テキスト構造での多角的な分析によって古代ロシア語におけるアオリスト、インパーフェクトの意味が動詞 быти においてどのように顕現するのかを具体的に示し、これを動詞 быи の意味機能の分析基準とした上で быи のアオリスト性、あるいはインパーフェクト性を検討した。

古代ロシア語では、アオリストとインパーフェクトの意味機能の分岐は、結局のところ、叙述内容を 1) 出来事として捉えるのか（アオリスト）、2) 状態として捉えるのか（インパーフェクト）の 1 点に絞られるが、この特徴は統語レベル、意味レベル、テキスト構造を通じて一貫して見られ、アオリストとインパーフェクトの意味機能と形態の呼応関係は堅持されている。例えば統語レベルでは быти + 名詞 + 形容詞構文における形容詞の定語機能と述語機能がある程度使い分けられていること、また意味レベルでは быти と結合する名詞には、アオリストと共起し易い名詞（出来事・現象名詞）とインパーフェクトと共起し易い名詞

（人間名詞）があるということ、さらにテキスト構造ではアオリストは必ず前景を示し、インパーフェクトは必ず背景を示す、といった特徴である。これらの特徴はまさに両者の機能的安定性を実証するものである。一方、形式的にアオリスト、インパーフェクト両要素を併せ持つ быи は多くの場合にインパーフェクト的に用いられているが、アオリスト的機能も許容する非安定型である。

語史的視点で解釈すれば быи は後にアオリスト化していく起源的なインパーフェクトであるとされている。быи は古代ロシア語の段階でも依然として用法上インパーフェクト性を強く残しているが、出来事を述べる場合にはアオリスト的機能も発揮する。このことは、スラヴ語のテンス・アスペクト体系の発展過程において、アオリスト活用の一部（単純アオリスト）が起源的にインパーフェクトであったということを、形態のみならず、用法におけるアオリスト性、インパーフェクト性の混在によっても証明しているのである。

（よこい さちこ・大阪外国語大学）

cf. 『ノヴゴロド第一年代記（シノド本）』における動詞 быи の用法について『ロシア・東欧研究』第 6 号、大阪外国語大学ヨーロッパ I 講座、2002 年 3 月。